

カナダ研究年報

The Annual Review of Canadian Studies
La revue annuelle d'études canadiennes

第 40 号

2 0 2 0

日本カナダ学会

The Japanese Association for Canadian Studies
L'Association japonaise d'études canadiennes

目 次

<論文>

- 20 世紀前半のカナダ平原諸州における沖縄県出身者の移住過程
..... 花 木 宏 直 1
- 19 世紀後半オンタリオ州立「精神遅滞」者施設の役割と実際
ー同州報告書の分析ー 下 司 優 里 18

<書評>

- 田林 明 編著『カナダにおける都市ー農村共生システム
ー農村空間の商品化と地域振興ー』（農林統計出版、2020 年）
..... 藤 田 直 晴 36
- ルース・アビィ 著、梅川佳子 訳『チャールズ・テイラーの思想』
（名古屋大学出版会、2019 年）..... 丹 羽 卓 41
- 長谷川瑞穂『先住・少数民族の言語保持と教育
ーカナダ・イヌイットの現実と未来』（明石書店、2019 年）..... 岸 上 伸 啓 46
- 和泉真澄『日系カナダ人の移動と運動ー知られざる
日本人の越境生活史ー』（小鳥遊書房、2020 年）..... 下 村 雄 紀 51
- 水戸考道・大石太郎・大岡栄美 編著『総合研究 カナダ』
（関西学院大学出版会、2020 年）..... 田 中 俊 弘 56
- ### <文献リスト>
- 日本におけるカナダ研究・カナダ関連の近著 61

<書評>

長谷川瑞穂『先住・少数民族の言語保持と教育 カナダ・イヌイトの現実と未来』 (明石書店、2019年)

岸上 伸啓

カナダでは、1982年憲法によって先住民をインディアン(現在の呼称はファースト・ネーションズ)、メイティ(メティスとも呼ばれ、先住民とヨーロッパ人との間に生まれた人の子孫で独自の文化を継承している人々)、イヌイトであると規定している。2016年のカナダ国勢調査によると、カナダの総人口3,450万人あまりの中で先住民人口は約163万人である。その内訳は、ファースト・ネーションズが約97.7万人、メイティが約58.8万人、イヌイトが約6.5万人である。

極北地域の狩猟・漁労民として知られてきたイヌイトは、現在、極北地域の故地とカナダ南部地域に住んでいる。内訳はヌナチャヴット(ラブラドル地域)に約2千人、ヌナヴィク(ケベック州極北部)に約1.2万人、ヌナヴト準州に約3万人、イヌヴィアルイット(北西準州西部)に約3千人、総計4.7万人あまりが極北地域に住んでいる。そして約1.7万人が極北地域を離れ、カナダ南部地域に居住している(Inuit Tapiriit Kanatami 2018: 8)。

ヌナヴト準州は、1999年に北西準州から分離し、新たな準州となった。その人口の85パーセント以上はイヌイトであり、実質的にイヌイトの意思を政治に反映できる準州であった。それから20年あまりが過ぎ、同準州の成功とともに問題点も顕在化した。そのひとつが、イヌイト語の継承の問題である。

本書はカナダ・ヌナヴト準州イカルイトでの調査をもとにイヌイトの言語と学校教育の現状について報告し、言語教育の立場から考察した著作である。具体的には、2016年現在のイカルイトにおけるイヌイト語の使用状況、同言語による会話や読み書きの能力、同語に対する意識、学校教育の実態、教育上の阻害要因について調査した結果を検討している。

本書は、序章と終章以外に12章から構成されている。序章は、目的や研究方法、危機言語の問題、先住民教育について概略している。第2章と第3章では、ヨーロッパ人と

の接触以前から現在までのイヌイットの歴史について整理している。第4章でカナダの多文化主義とその問題点を述べた後、第5章はヌナヴト準州成立以前のイヌイットの教育について紹介する。これらの章は本研究を理解する上での前提と歴史的脈絡を提供している。

第6章ではヌナヴト準州における教育および教育法について記述している。現在のヌナヴト準州の学校教育は、2008年のヌナヴト教育法に基づいて行われている。それは、バイリンガル教育によるイヌイット語保持とイヌイットの伝統知識(Inuit Qaujimajatuqangit、略称IQ)にもとづく文化教育を重視している。ヌナヴト準州では、高校中退率が高く、卒業率(2014年度は31.5%)が低い、2014年度以降も男子学生の状況は悪化しつつある(107頁)。中退者は遅刻者が多く、出席率も低い(108頁)。出席率は、小学校で90%、中学校で80.6%、高校で66.6%と高学年に進むほど、低くなっている(108-109頁)。全国共通テストによってヌナヴト準州のイヌイットの英語識字力も低いことがわかっている(109頁)。著者は以上の点を総合的に検討して、高校中退者が多いのはバイリンガル教育がうまくいっておらず、英語やイヌイット語の習得が成功していないからであると指摘している(110頁)。

第7章ではイヌイット語の現状について紹介する。カナダにおけるイヌイット語の使用については時代差や地域差が見られる。イヌイットの中でイヌイット語を流ちょうに話せる率は、2002年の65%から2011年の55%へと低下している。ヌナヴィクでは15~24歳で同言語を話せる比率は95%であるが、ヌナヴト準州では64%である。その他の地域ではその率ははるかに低くなっている。すなわち、イヌイット語による会話能力は、ヌナヴィク以外では年々低下している(122頁)。とくに、若者のイヌイット語の使用能力に地域的格差が顕在化している。マリカ・モリス(Marika Morris)は、ヌナヴィクにおける小学3年までのイヌイット語教育の実施とイヌイット語の教員養成の充実度をヌナヴト準州や他の地域とは異なる点として挙げているが、著者はそれらの要因に加えて、家庭でイヌイットが使用されているかどうかという要因も格差を生み出していると指摘している(123頁)。

第8章と第9章では、著者が2016年8月にイカルイトにおいて実施したアンケート調査、インタビュー調査、参与観察について説明した後、それらの調査から得られた結果を整理し、分析している。第8章では、2016年8月のイカルイトでの調査によって、(1)若い世代(とくに20歳代)に、イヌイット語を使用しないで英語を使用する者が増加していること、(2)過去の旧北西準州時代のイヌイット語バイリンガル教育で、30歳代はイヌイット語を保持している率が高いこと、(3)40歳代~60歳代は公立小学校で英語による教育を受けているが、家庭や地域でイヌイット語が使用されていたため英語とイヌイット語の両方に堪能であることなどを指摘している(134頁)。この調査はイカルイト

における世代差を浮き彫りにした点で意義深い。また、著者は、アンケート調査とインタビュー調査によって20歳代の多くのイヌイットが家庭でイヌイット語を使用する頻度が低いことや同語の文章を読めないことを明らかにし、「バイリンガル教育はうまくいっていない」のではないかと指摘している(145頁)。

第9章では、イカルイトにおける教育の現状を小中高校の校長へのインタビューや参与観察によって調査した結果を述べている。小学校でのバイリンガル教育はイヌイット語よりも英語の方を使い、イヌイット語を保持できない要因となっていること(152頁)や中学校・高校と進むにつれて彼らの言語や文化の教育の割合が減り、学生の多くが文化喪失を体験し、中退の大きな要因となっていること(155頁)、イカルイトでは家庭や友人間でイヌイット語が使用されているが、職場や学校、会議では英語が使われることが多いダイグロシア社会であり、バイリンガル社会ではないこと(161頁)などを報告している。

そのうえで第10章では、ヌナヴト準州の教育とイヌイット語の継承・保持を阻む要因について、バイリンガル教育や言語の威信性、ヨーロッパ系カナダ人優位の教育体制と関連させながら分析している。著者はさらにイカルイトで実践されているバイリンガル教育は、小学校の早い時期に教育言語が英語に移行しているうえに、イヌイット語の教員や教材が不足しており、その結果イヌイット語の弱体化を招いている点を強調し、英語への同化を促す削減的バイリンガル教育であると指摘する(167頁、176頁)。すなわち、ヌナヴト準州ではバイリンガル教育が法律通りには行われておらず、英語とイヌイット語の力関係は変わらず、英語への同化的な色彩が強いままでであると主張する(177頁)。

第11章では、イヌイットの歴史的トラウマや社会問題を教育との関連で紹介し、分析している。イヌイットの学校教育の問題は、イヌイットが抱える社会問題と深くかかわっており、学校教育がイヌイット社会に十分に浸透していないという。とくにイヌイットが歴史的におってきた深い心の傷(トラウマ)が学校への不信感を生み出すとともに、イヌイット文化やイヌイット語を軽視している現在の教育カリキュラムや、トラウマと関連する家庭内暴力、麻薬やアルコールの乱用、いじめ、貧困、10代の妊娠などが高校中退の原因であると指摘する(199頁)。

第12章では、さらにヌナヴト準州の教育問題とその解決を考えるためにグリーンランドやハワイ等との比較を試みている。そして最終章において著者は、ヌナヴト準州のイカルイトでは同準州成立後、イヌイット語の使用頻度は低下し、イヌイット語力も低下し、バイリンガル人材の育成には成功していないと指摘するとともに、教育問題の解決策を提案する。すなわち、イヌイットの経済、社会の改善以外に、教育の現場において、(1)ヌナヴト教育法の規定に従ったバイリンガル教育の実施、(2)イヌイット文化を教育に導入すること、(3)イヌイット語を教えることができる教員養成とイヌイット語教育のため

の教材開発、(4) イヌイットの声を反映させるボトム・アップの教育体制の構築、(5) イヌイット語の標準語化の推進、(6) 幼稚園から高校までのイヌイット語のイマージョン教育の一貫校の創出を提案している。そして最後にイヌイット自身による言語を残したいという思いがもっとも重要だと指摘する(225頁)。

本書の学術的な貢献は二つある。一つは少数先住民族の言語と学校教育とのかかわりに対する貢献であり、もう一つはイヌイット研究への貢献である。カナダにおいてイヌイットは、他の先住民族と比べるとはるかに母語の保持率や使用率が高いことが知られている。本書はそのようなイヌイットも母語の継承の危機に直面しているという現実を我々に伝えており、少数先住民族の言語の継承と学校教育の役割に関する貴重な報告書である。

近年、イヌイット・コミュニティから調査許可を得ることが難しくなっているため、イヌイット研究は停滞している。このような状況の中で、イヌイット・コミュニティの同意を得て、イヌイット語や学校教育について、(1) 既存の文献調査、(2) 現地でのアンケート調査、(3) 現地の学校等でのインタビュー・参与観察を組み合わせて調査を実施し、イヌイットの直面している現実を取り扱った研究を出版したことは大変に喜ばしい。本書から、イヌイット語や教育の現状について多くのことを我々は学ぶことができる。また、少数民族を取り巻く現状を改善するためのヒントを得ることもできる。たとえば、イヌイット語の保持や学校教育の改善における急務の一つは、イヌイット語を教える教員やイヌイット語で教えられる教員を養成することであることが分かる。

以上、指摘したように本書は、少数先住民イヌイットの言語と学校教育に関する貴重な研究成果であるが、問題がないわけではない。ここでは三つの問題点を指摘しておく。

第1は、調査方法に起因する問題である。アンケート調査は、イカルイトのヌナヴト極北カレッジ、イヌイット協会、そしてヌナヴト準州政府教育省で実施され、その対象は61名(男性24名、女性37名；有職者36名、大学生20名、高校生3名、無職2名)である(126頁)。この調査に参加した協力者の代表性や有意性はどのように担保されているのか。また、アンケートの質問項目(127頁)が、十分にイヌイット語の使用状況や教育について把握する内容であるか。これらの点について十分な説明が欲しかった。

第2は、参与観察の問題である。2016年8月に実施された現地調査は、「(前略)イカルイトのスーパーマーケット、食堂、学校、イヌイット協会、ヌナヴト北極カレッジ、準州政府機関、ホテル、教会、イカルイト市内などで行われた。職場の仲間どうしの会話、父兄どうしの会話、友人間の会話、広告や標識の状況などを観察した」(129頁)とあるが、これは観察であり、参与観察とはいいいがたい。家庭内などでの日常的なイヌイット語の使用状況は、長期にわたる住み込み調査や定期的な訪問によって把握する必要があると考える。

第3は、グリーンランドやハワイ等との比較の問題である。第12章の言語に関するグリーンランドのイヌイト、ハワイの先住民、ニュージーランドのマオリ、日本のアイヌの比較はあまりにも表面的な比較に終わっている。基本文献を渉猟したうえで、それぞれの先住民の歴史や政治経済的状況(脈絡)を踏まえたうえで比較検討する必要があるだろう。

ここでは本書に関して三つの問題点を指摘したが、本書全体の重要性を貶めるものではない。評者は、本書を学術的に高く評価したうえで、完成品とはみなさず、今後の研究を展開するための出発点とすべきだと主張したい。今回の調査で発見したり、提案したりしたことに関して、イヌイト語教育の改善を実現するために、イヌイトの関係者と協働してより綿密で長期的な調査を計画し、実施することを提案する。また、今後の課題として、都市在住イヌイトのイヌイト語の使用状況や学習に関する調査(Kishigami 2015)や、ヌナヴト準州とヌナヴィク、ヌナチャヴット、北西準州のイヌヴィアルイト地域のカナダ極北4地域でのイヌイト語の使用状況や学校教育についての比較調査・研究の必要性を指摘したい。本研究がイヌイト研究のさらなる起爆剤になることを期待したい。

Reference

Inuit Tapiriit Kanatami, (2018) *Inuit Statistical Profile 2018* (Ottawa: Inuit Tapiriit Kanatami).

Kishigami, Nobuhiro, (2015) Low-income and Homeless Inuit in Montreal, Canada: Report of a 2012 Research, *Bulletin of the National Museum of Ethnology*, 39(4): 575-624.

(きしがみのぶひろ 人間文化研究機構・国立民族学博物館)

The Annual Review of Canadian Studies
Le revue annuelle d'études canadiennes
KANADA KENKYU NENPO

2020

No. 40

Articles

- Okinawan Migration Processes in the Canadian Prairies
in the Early 20th Century..... Hironao Hanaki
The Role and Reality of the Orillia Asylum for Idiots
in the Late 19th Century Ontario Yuri Geshi

Book Reviews

- Akira Tabayashi, ed., *Kanada-ni-okeru Toshi—Noson Kyosei Sisutemu (Urban-rural Symbiotic Systems in Canada: The commodification of rural space and regional promotion)* (Agriculture and Forestry Statistics Publishing Inc.,2020)
.....Naoharu Fujita
Ruth Abbey, *Charles Taylor (Philosophy Now)* (London: Acumen, 2000)
trans. by Yoshiko Umekawa (The University of Nagoya Press, 2019)
..... Takashi Niwa
Mizuho Hasegawa, *Senju-Shosu-Minzoku no Gengo-hoji to Kyoiku (Language Retention and Education of Indigenous and Minority Peoples)*
(Akashi Shoten, 2020)Nobuhiro Kishigami
Masumi Izumi, *Nikkei Kanada-jin no Ido to Undo — Sirare-zaru Nihonjin no Ekkyo-seikatsu-shi (Japanese Canadian Movement)* (Takanashi Shobou, 2020)
..... Yuki Shimomura
Takamichi Mito, Taro Oishi, and Emi Ooka eds., *Sogo Kenkyu Kanada (Understanding Canada: An Interdisciplinary Approach)*
(Kwansei Gakuin University Press, 2020)..... Toshihiro Tanaka

Recent Publications on Canadian Studies in Japan

The Japanese Association for Canadian Studies
L'Association japonaise d'études canadiennes